

|| 聞き書き報告 ||

乙女たちの「海ゆかば」(顧みはせじ)

高橋 憲子

序

一九三七年(昭和十二)に信時潔が作曲した「海ゆかば」とは一体、少女や若い女性にとってどんな歌だったのであろうか。今回、一九二四年(大正十三)から一九三五年(昭和十)生れの女性たちに取材したが、誰も「海ゆかば」を学校や公式の場で歌った覚えはないという。もちろん、その歌を知らない人もいない。皆、よく知っていると答える。太平洋戦争期、ラジオ放送の戦果発表(大本営発表)が玉砕を伝える際に、必ず冒頭歌として流されたという。従軍兵士の「毎朝、歌わされた」という証言とは違っている。

通信省電務局無線課長の宮本吉夫は、「国家と放送・上」『放

送』(一九三九年(昭和十四)七月)の冒頭に、ラジオは国家の意思を運ぶ。聴取は国民的行為である。一家庭一受信機を備えよ」というナチスドイツのスローガンをかかげ、ラジオ普及の国家的必要を説いている。なぜかの理由として、放送は国論の統一には他の何ものよりも強い力を持っているとし、「放送は何故に国論の統一にかような大なる力をもつものであろうか。それは一つの声が同時に直接全国民の耳に入ると言う放送のもつ独特の機能と独占的公共的な形態に依るもので」と、メディアの特性と独占的公共的形態をあげ、新聞との違いを強調する。(竹山昭子解説『放送ニユース解説・国策放送』(別冊)、一九九〇年七月)

このように日本の戦前・戦中の放送は、政府が直接関与する

ものであった。例えば、一九四四年八月に女子挺身勤労令が公布されるが、これに先立ち、一九四三年には女性の勤労働員の必要性を説く厚生次官武井群嗣の弁が放送されている（『若き女性に懇ふ』『放送ニュース解説・国策放送』十一月一日号）。これが女子挺身隊の実質的な発足であろう。国民の情報源はラジオであり、「ニュース」「臨時ニュース」「演説の合い間に」「軍国歌謡」が電波を通じて国民の士気を鼓舞した。こうした放送という手段によって「海ゆかば」も毎日のようにラジオから流され、若い女性たちも自然にこの歌詞を覚え、戦争に向けて国民一丸への道を進んでいたのであろう。

#### 《「海ゆかば」歌詞》

海ゆかば 水づくかばね

山行かばくさむすかばね

大君のへにこそしなめ

かへりみはせじ（のどには死なじ）

※表記はCD『海ゆかばのすべて』に準拠。

歌詞は二種類ある。「かへりみはせじ」は、大伴家持の「陸奥国に金を出す詔書を賀く歌」（萬18・四〇九四）の長歌から引用している。一方、「長閑には死なじ」となっているのは、「陸奥国出金詔書」（『続日本紀』第13詔）による。太平洋戦争下、楽曲「海ゆかば」を日常茶飯事のように聞きながら女性たちがどう生きたかをここに記す。

※「聞き書き」1〜4の中で《 》で括った部分は当事

者の言葉ではなく、他サイト・他書からの引用、または筆者のコメントである。

#### 1 橋本慶子さんの場合（旧姓東原）

一九二四年（大正十三）生れの橋本慶子さんによると、「物心つく頃から日本はずっと戦争が続いていたため、暗い青春だった、いや青春は全く無かった」と言う。栃木県の烏山町（現在那須烏山市）で材木屋の娘として生れた彼女は、十二歳の時、宇都宮第二高等女学校に入学し四年間を過ごした。烏山から烏山線で宇都宮まで通った。家から学校まで二時間ほどかかったので、冬は暗いうちに家を出なければならず、大変だったという記憶がある。十八歳頃から実践女子大学の前身実践女子専門学校の家政科に入学し、東京での寮生活が始まったが、戦争が激しくなり、一年短縮して卒業した。家政科で料理・理科を勉強したが、料理といっても材料はなく、講義が多かった。

《慶子さんの受けた教育は尋常小学校に始まる。一八八六年（明治十九）に第一次小学校令の公布により発足したこの学制は一八九〇年の第二次小学校令、一九〇〇年の第三次小学校令から一九〇七年の一部改正を経て、一九四一年（昭和十六）に国民学校令が公布されるまで続く。六歳から十二歳の児童を対象とした義務教育であった。尋常小学校卒業後は、高等小学校、青年学校普通科などに進学するか、就職した。慶子さんが「十八

歳頃」と言うのもそうした事情による。》

十九歳頃、烏山町（現在那須烏山市）の女子挺身隊に入った。そこは宇都宮の女学校出身の上流家庭の子女十人ぐら이었다が、その後、雀宮（地名、現在は宇都宮の一部）に移り寄宿生活をしながら、大砲の弾作りの手伝いをした。そこでは、食事をゆつくりしたという記憶はなく、いつも立ち食い、風呂は一週間に一回くらい。その風呂もたくさん、の女性たちでぎゅうぎゅう詰めだった。

《女子挺身隊とは、一九四三年末から始まった女子の勤労奉仕団体のひとつで、一九四四年八月二三日の「女子挺身勤労令」によって法制化された。主に未婚女性（十四歳から四十歳の内地（日本）の女性）によって構成されていた。戦時日本の労働力が逼迫する中で、強制的に職場を配置換えする国家総動員法下の国民総動員体制の補助として行われ、工場などでの勤労労働に従事した。女子挺身隊は、大きく二つに分けて、学校の同窓会単位的女子挺身隊と、地域からの地区別挺身隊に分けることができる。》

その後、戦争後半から終戦まで、栃木県馬頭町（現在栃木県那須郡那珂川町）の青年学校で半年程国語の先生をした。理系の彼女は国語の専門ではなく、いやいや松尾芭蕉

の句を一、二句教えたくらいで、後はきゅうりの切り方などを教えていた。青年学校での授業は勤労奉仕、草取りや畑仕事などが中心で、農家の子供が多いので自分より生徒の方が上手だった。教職につくことで、女子挺身隊から抜けられることができた。

《青年学校は一九三五年四月に始まり、一九四七年三月まで続いた。当時の義務教育機関である尋常小学校、または、国民学校初等科六年を卒業した後に、中等教育学校（中学校・高等学校・実業学校）に進学をせずに勤労に従事する青少年に対して社会教育を行っていた。慶子さんが国語の先生に従事したのは、徴兵による男性教員の不足のためと思われる。》

《松尾芭蕉は元禄二年三月二十日に深川を船出し（曾良「随行日記」、四月三日～四月十六日（一六八九年五月二一日～六月三日）まで那須黒羽に滞在した（『奥の細道』）。現在、その記念として黒羽芭蕉の館（現在太田原市前田）が建てられている。慶子さんが芭蕉の句を教えたというのもその由縁による。》

宇都宮は軍都であったため、東京と同様B29の爆撃を受けていた。爆弾が余ると帰り際に爆弾を放って行く。宝積寺（地名）の原野に立っていた時に爆弾を落とされ、恐ろしい目にあつた。

《明治四十年代から太平洋戦争末期まで、宇都宮には陸軍第十四師団司令部が常設され、その隷下の歩兵第二十七旅団司令部をはじめ歩兵第五十九連隊、歩兵第二十八旅団司令部や野砲兵第二十連隊、輜重兵第十四大隊、騎兵第十八連隊などが駐留した。また、この軍関係者を顧客とする様々なサービス産業が活況を呈し、軍需に沸く宇都宮は軍都と呼ばれるようになった。このため、頻繁に米軍による爆撃を受け、特に一九四五年七月十二日の宇都宮大空襲では約六百名が死亡した。その前々日の七月十日には宝積寺駅に停車中の列車が艦載機に銃撃され、死亡者四名、負傷者四名の犠牲者を出す。その後、宝積寺駅は七月三十日も艦載機の空襲により、列車内で死傷者が出ている。米軍は、宇都宮にある飛行場や軍需工場などに目標番号をつけ、B29や艦載機の攻撃の際に用いていた〔例〕目標番号…1666宇都宮陸軍飛行学校、等〕<sup>(6)</sup>。

戦後、慶子さんは一九四六年に東京出身の橋本正邦氏と結婚。栃木市在住の人の仲立ちでの見合い結婚であった。正邦氏は一九一五年（大正四）生まれ、東京帝国大学（現在の東京大学）文学部英文科出身で、入隊して長いこと北支に行っていたが、英語が堪能だったため、米軍との交渉に従事し、中国に残っていた千人程の日本人と共に帰国するまで半年か一年くらいかかったとのことである。

## 2 戸澤みつるさんの忘れ得ぬ人たち（旧姓成島）

一九二六年（昭和元）山梨県一宮町（現在山梨県笛吹市）に生まれた戸澤みつるさんは戦争中に出会った、忘れ得ぬ方たちの思い出を記している。

海ゆかば：この歌がどういう意味か、まして萬葉集のまの字も知らない頃からその莊重な調べ、その悲愴感は生活の中に染み込んでいた。私は一九二六年（昭和元）生まれ。満州事変・支那事変・日中戦争・大東亜戦争（太平洋戦争）と、言ってみれば人となる最も重要な時期を戦時下という言葉で一括りにされ、肉体的にも精神的にもふくらみ、広がりや欠いた極めて窮屈な規格化された生活を余儀なくされた。

学業は小学校時代、高女一〜二年までは先ず先ずとして、三〜四年に至っては英語は敵性言語として排除されたか、習った覚えなく、他に長刀などの時間も増え、農繁期にあつては農家への麦刈り、稲刈りなどの奉仕活動に動員され、腰を据えて将来の自分について考えてみるゆとりもなかった。そんな中で私は三人の大切な人を失うことになった。

《みつるさんの通った高女（高等女学校）とは、その後幾度かの改正を経るが、基本的には一八九九年（明治三二）二月に公

布された「高等女学校令」の規定に拠る。修業年限四年を基本とし、入学資格は尋常小学校卒業者（十歳以上）から高等小学校二年修了者（十二歳以上）とした。》

その一、小学校の友人、依田孝之君

農村の小さな村の小学校、一年から六年迄一クラス、男女共学。人数三十八名。男子が級長、女子が副級長をつとめた。級長と副級長の私はクラスをまとめると共に児童会の役員でもあった。この子が中学を了え、選んだ大学が満州国に新設された「満州建国大学」。

ある秋の日の夕暮、依田君は突然尋ねてきて、満州行きを告げた。私はその時、畑の草取りをしていた。二人はお蔵の壁に倚つて、折からの秋の没日の光を浴びながら、何を話したか忘れたが、数多くは語らなかつた。無言の刻が過ぎて別れたのだが、その後彼は大学を卒業し、現地召集で徴兵され、戦地に赴いたと聞くが、以後消息を絶つた。戦死を知つたのはずっと後のことだつた。二人の間に流れたあの仄かな感情を今も愛しく思い、戦争を憎む。

《満州建国大学は、かつて存在した「満州国」の首都・新京（長春）にあった國務院（満州国における行政機関）直轄の国立大学。略称は建大。一九三八年（昭和十三年）五月に開学、一九四五年八月、満州国崩壊に伴い閉学した。この間に学生を

九期生までを受け入れ、約千四百名が在籍した。跡地には現在長春大学がある。

※「建国大学は満州国に当時暮らしていた漢民族、満州族、朝鮮族、モンゴル族などの民族を支配するため「五族協和」のスローガンの下、満州国の最高学府として設立された。学生たちには当時としては想像もつかないような「言論の自由」が与えられ、連日の座談会では日本政府に対する非難が日本人学生に對して向けられるなど、独自の文化を生み出した。しかし、戦後、建国大学で学んだ学生たちは、大学が有していた特殊性を理由に自国で激しく迫害され、弾圧された。特に他国の学生たちの多くが自国の政府から受けた迫害は悲惨なものであつた。》

《一八七三年（明治六）には国民の義務として国民皆兵を目指す徴兵令が出され、のち兵役法となつた。一八八九年に徴兵制度は大改正され、法制度上男性に對して国民皆兵が義務付けられた。太平洋戦争において戦局が激化するにつれ、現役兵としての期間を終えた後の予備役や後備役にあつた元兵士の国民も召集令状によつて召集され、大戦末期の一九四五年（昭和二〇）には徴集率は九割を超えた。第二次世界大戦末期になると兵力不足が顕著になり、文科系学生への徴兵（学徒出陣）や熟練工・植民地人の徴兵が行われた。日本の降伏後は、陸軍省・海軍省の解体に伴い、日本軍そのものが消滅し、徴兵制度の根柢となる兵役法は、一九四五年十一月十七日に廃止された。旧

満州、フィリッピン、沖縄など、戦争が実際に行われている土地近辺に住んでいる人が召集される場合を現地召集と言った。》

その二―1、石渡（後に絵鳩）毅先生

高女一年（十二歳）一学期間を教えていただいた先生。東京帝国大学卒、和辻哲郎先生門下。

卒業後、文部省に勤められたが、学者の思想調査などの仕事に嫌気がさし、転じて教師になったと聞く。山梨高女には女子師範が併設されており、師範と高女の倫理・修身を担当された。授業はたいへんユニークで、徳目についての一応の授業をされた後は背広の内懐から岩波文庫を取り出し、様々の本を読んで下さった。「銀の匙」(中勘助著)、「君たちはどう生きるか」(吉野源三郎著)、「絵なき絵本」(アンデルセン作、茅野蕭々訳)など洋の東西を問わず多岐に亘った。学期末テストで「勇氣」という題名で、生まれて初めての小論文とも言うべきものを書かされた。その結果が「師範・高女通して満点だったのには驚いた。嬉しかった」。なお先生は放課後は図書室で読書されるか、運動場で独り陸上競技に熱心だった。それやこれやで、先生からの影響は計り知れず、今日の私への方向づけ、自分でも気付かなかった可能性に目覚めさせて頂いた生涯の大恩人、先生なくして今日の私はあり得ない。この先生の人生をあの十五年戦争はすっかり狂わせてしまった。

《絵鳩毅氏は一九三九年、山梨県女子師範学校、上田高等女学校で教員を勤めた後、一九四一年、東部第64部隊入隊。一九四二年(昭和十七)北支那方面軍に転属(陸軍軍曹・分隊長)。敗戦後シベリアに捕虜として五年間、戦犯として中国に六年間抑留。一九五六年、起訴免除になり、帰国は、二十八歳で出征してから十五年後の四十三歳の時であった。》

その二―2、岡本芳之助先生 京都帝国大学卒、天野貞裕先生門下。

高女二年の時の担任。九十一年生きて、この先生程の端麗なお姿を見たことがない。石渡先生と同じく修身を担当された。先生もホームルームや授業中、たとえば「宵待草」の歌を唱って下さったり、「盲のジェロニモとその兄」(アルトゥア・シュニツラー作)とか「ペンテジレーア」(クライスト作)の話など遠くを眺めるようなお顔で興味深く話して下さった。どうしてそんなことができたのか今では不思議に思うが、当時の児童劇団「東童」にも関係されていた。

ある時、友人三人で先生の官舎をお訪ねした。先生は手巻の蓄音器でレコードをかけて下さった。チゴイネルワイゼン! こんな美しい音楽が世にあるものかと全身がただならぬ感動に震えた。以来今日迄、私は「クラシック」一辺倒。ヴァイオリン大好き人間。こんな世界の入り口へ私

を連れ立たせて下さった先生、文学芸術一般、世にある美しいものへの憧れを育てて下さった先生、この先生も程なく戦地へ駆り出され（三十八歳）、南方戦線で戦病死されてしまった。亡くなった後、天野貞裕先生から頂いた「悲しい時は泣くだけ泣きなさい」という手紙を読みながら岡本先生の奥様と手を取り泣いた思い出もなお新しい。

《みつるさんはその後、一九五四年から三十年間、教職に従事した。その間、教えた多くの生徒から慕われ、現在も彼らとの交遊が続く。》

### 3 石亀節子さんの愛しき日々（旧姓森）

石亀節子さんは、一九三二年（昭和七）大分県の玖珠川のほとりの温泉旅館に生まれた。

一九三七年～一九三八年・「日出台ひじょうだいでの大演習。（五～六歳）」

サイドカーで憲兵が来宅（妙にはっきり覚えてる）。

倉庫に鉄の大釜が準備され、家の者や近所の人も来て、炊出しがはじまった。

久留米連隊の宿舎になると大さわぎになる。

大釜で炊き上げたごはん、おむすびがたくさん作られていたこと、そのお釜の底に出来たおこげでの塩むすび、子供たちは大喜びして食べたこと。

大玄関に房で飾られた美しい連隊旗があったこと。騎兵隊の蹄の音、歩兵の軍靴の音は記憶に残る。

すぐそばの久大線で運ばれる大砲や戦車の貨物列車のドロ口ひじょうだいという重い響きがいつまでも続いていたこと。

大演習の前には日出台ひじょうだいの麓の村人が総出で、マムシ狩りをするそうだと祖母が話していた。因みに日出台は現在、自衛隊や米軍の演習地である。

一九三九年～一九四二年「病院船に慰問。旗行列、提灯行列。（小

学二年～五年）この頃は、門司市に転居していた。」

クラスで何人かずつが「兵隊ばあさん」と呼ばれていた先生につれられて門司港に帰って来た病院船の慰問に行った。傷病兵のいる船内で歌ったり踊ったりしたが、合唱曲は思い出せない（と思っていたが）、これを書いていて、ふいに「ジャンケンポン」を歌って踊っていたこと、その歌詞が全部よみがえってきて驚く。何度も訪れたのだろうか？ 白い大きな船腹と煙突に赤十字のマークがくっきりとあつたこと、白衣の兵をささえる従軍看護婦さんのてきぱきと、たのもしかったことなども。

学校では慰問袋に入れる作文をよく書かされていた。

母たちは婦人会（国防婦人会）で慰問袋を作っていた。

旗行列、提灯行列が戦勝記念となされた。

登校途中の神社に毎朝お参りをしていた。

遊びの中でのてまりつきやお手玉では、童謡よりも乃木大将、広瀬中佐などを歌っていた。

《国防婦人会とは、一九三二年から一九四二年まで存在した日本の婦人団体。略して「国婦」。白エプロン（かつぼう着）と会の名を墨書した白タスキを会服として活動。出征兵士の見送りや慰問袋の作成など、銃後活動を行った。》

《節子さんの言う乃木大将の歌とは文部省唱歌「水師営の会見」のことで、乃木大将は日露戦争の旅順攻囲戦の指揮者である。国民学校国語教科書の教材「水師営の会見」については以下のような記述が見える。》

佐々木信綱の作品で、一九一〇年（明治四三）第二期国定国語教科書の「小学国語読本巻十」（五年後期用）に掲載され、翌一九一一年に発行された「尋常小学唱歌第五学年用」に岡野貞一の作曲で掲載されて以来、国語教科書では、第四期まで継続して掲載され、音楽では国定教科書の第三期に当る「国民学校初等科音楽四」（六年生用）まで、一貫して掲載されたもので、戦前の教育を受けた人にとって懐かしい唱歌として親しまれてきた。曲は所謂ヨナ抜き五音短音階の哀調こもったもので、軍歌というより、やはり「唱歌」とよばれるにふさわしいもので、戦後も地方では遊戯歌（お手玉歌、まりつき歌）として歌われ続けたものであった。

広瀬中佐は日露戦争の功労者、特に戦前は「軍神」として神格化された。「広瀬中佐」は、一九一二年（明治四五）『尋常小学唱歌 第四学年用』に初出。作詞作曲不詳。

「水師営の会見」佐々木信綱作詞・岡野貞一作曲／文部省唱歌  
1. 旅順開城 約成りて 敵の將軍 ステッセル  
乃木大将と会見の 所はいずこ 水師営

「広瀬中佐」の歌  
1. 轟く砲音、飛来る弾丸。荒波洗ふ テッキの上に、  
闇を貫く 中佐の叫び。「杉野は何処、杉野は居ずや」。》

一九四二年～一九四三年・「奉安殿、君が代、教育勅語。叔父たちの戦死と出征。（小学五年～六年）この頃は、大分に戻っていた。すでに国民学校だったか（国民学校令、一九四一年）。」

学校の校門近くに奉安殿があった。両陛下の御真影が安置されているというので、登下校では必ず不動の姿勢で最敬礼をしなくてはならなかった。

校長先生のお話では、常に「天皇陛下は私たちの大御親であらせられ、私たちは陛下の赤子である」と聞かされた。「小国民としての自覚を持つように」とも。

奉安殿・君が代・教育勅語は三位一体であり、教育勅語は暗誦させられた。



陸軍、ついで海軍と、二人の叔父が戦死する。祖母の凜とした姿が忘れられない。

十八年には、小学校教師であった叔父が出征する。花が大好きだった。花の種子をまいてから召集されて行った。夏、大輪の朝顔が咲いた時、「戦地の叔父はきつと無事なのだ」と母と話した。戦後、この叔父は南方から帰還した。

#### 一九四四年…「女学校入学」

女学校入学。口頭試問では大本営発表の戦況と戦果について質問される。

物はとみに不足。制服は国民服というヘチマ衿の上衣に母が着物をといて縫ってくれたモンペをはく。ズック靴は配給制で入手困難、下駄ばきが多かった。

体操の時間は主として薙刀をふるっていた。配属将校による教練もあった。

「欲しがりません、勝つまでは」「鬼畜米英・撃ちてしやまむ」「勝つて兜の緒を締めよ」の標語があふれていた。

千人針も玉結びをするほど赤糸がなくて、丸印の中に赤糸の返し針で（玉結びをせずに）刺していた。寅年の人は歳の数ほど刺せるといので、寅年の祖母は大変だった。

「海ゆかば」はよく覚えていたが、どんな時に歌っていたのだろう。記憶がない。それよりも、いつも歌っていたのは、「御民われ生ける<sup>しるし</sup>驗あり<sup>あめつち</sup>天地の栄ゆる<sup>あめつち</sup>時にあへらく思

へば」であった。（後年、萬葉集巻6・九九六番歌であったことを知る。）

《「御民われ」も国民学校初等科六年前期用『初等科国語七』に掲載されている。（山中恒氏前掲書（注9）、三一〇頁）》

一九四五年…「学徒動員令そして終戦」 女学校二年、学徒動員令下る。

片田舎の市街地に小倉造兵廠が北九州より大挙疎開してくる。そのバラックのような工場に、防空頭巾を肩から下げ、鉢巻きをまいて、隊列を組んで通った。

工場では班長さんという方がノギスとやらの使い方を説明して下さっていた（銃身を計るとで）。

途中の山や丘に横穴を掘っていたのは半島からの強制労働者らしかった。工場が入るためだったのか。製品（武器）を収納するためだったのか。

汽車通学生であったが、女学生の車両に中学上級生の方がやって来て、「〇〇は明後日、土浦に入隊します」「××は呉に入隊します」と拳手の礼をして挨拶に見えることが度々あった。女学生は拍手で答えていた。（特攻に行かれるのだ）と暗黙の了解をしていた。

造兵廠があったため、町には米軍の飛来もあって、グラマンの低空飛行による機銃掃射にもあって、爆撃をされた所

も……。私達は免れた。

八月十五日……

工場にゆくと正午に重大放送があるので、と帰宅させられる。帰路の駅のホームで敗戦を知る。茫然自失……。三ヶ月の動員であった。

#### 4 杉田ふじ子さんの疎開（旧姓西嶋）

一九三五年（昭和十）山口県下関市生まれのふじ子さんは疎開時の様子を綴る。

一九四一年十二月八日、太平洋戦争勃発。翌一九四二年、八雲国民学校に入学した私は、一九四四年には、三年生になっていた「※五歳の時、父親の転勤に伴い下関から東京へ移り住んでいた」。一年、二年は午前組と午後組に分けられていたが、三年生からは午後も授業があった。その頃か、お米の配給は一人当り一食分七勺と聞いた。百グラム位だろうか。戦争は激しくなり、空襲のニュースも増えた。三年生の一学期が終る頃、学童疎開が実施されることになった。目黒区は山梨県、八雲校は甲府に決まる。

その前後に、父に召集令状が来た。一八九七年（明治三十）生まれの父は満年齢で四十七歳、当時は数え年であったから四十八歳、じきに五十という年であった。父は若い時志願兵として入隊していて、少尉になっていた。子供の

頃は勿論、今もその辺りの事情はわからぬが、そんな年になって召集されたのである。父が集合する場所は生地に近い小倉の連隊で、そこから当時の朝鮮・京城に渡った。

東京を発つ日、東京駅には父が勤務していた会社の人が社長はじめ大勢での見送りであった。数え年十歳の私にも、その時のありさまは印象に強く、一枚の写真のように脳裏に浮んで来る。見送った後、母と妹・弟と家族四人、今夜からは帰宅せぬ父の家に戻り、私は声立てず、母の膝にすがって泣いた、と母は後年何度か口にしていた。

学童疎開も近づいた。私は秋になると小児ゼンソクが起り虚弱であったので、親元から離すのを親は心配した。母の郷里は兵庫県揖保郡大津村、姫路の西部である。その祖父母を頼り、母と三人の子は縁故疎開を選んだ。夏休みに入り、八月半ば頃か、その大津村から祖父が迎えに上京し、私と妹がまず大津に入った。母は後片付けがあり、弟はまだ数えの五つであった。しかも、当時はすでに食料事情は悪化をたどり、栄養状態すこぶる悪く、育つかどうか案じられた子であった。

夏休みの終る頃、祖父に伴われて大津国民学校に転校。この学校は母の兄弟姉妹が子供の頃全員通った村の学校。関西圏であるこの辺りでは、大阪、神戸からの疎開の子は

珍しくなかったが、東京から来た子は私一人。先生からも児童からも特別な目で見られていたらしい。いじめも受けた。

その後、父が従軍中の京城から一時帰国できることになった。どう来て、どう任地へ戻ったか子供だった私は何も知らない。でも、任地へ戻る前に大津へ立ち寄った。父さんが来られるから今日の午後は早退させていただくよう、朝、母から言われて登校したが、先生にどう言えばいいのか、またどう言ったのか、まったく覚えていない。でも、首尾よくお許しを得た私は、秋の爽りの近づいた播州平野の田んぼの中を父母妹弟と家族五人水入らずで歩いたことだけ思い出す。

一九四五年は八月十五日に至るまで、日本列島は連日空襲に脅えた。時々刻々の恐怖の報道が、どの位国の隅々まで行き渡っていたのか知らない。ラジオが空襲警報を告げる。「西部軍管区情報―敵機は紀伊半島に沿って北上中……」というフレーズだけが浮かんでくる。

祖父の家の南側に張り出した部屋が私たち疎開の家族に与えられていた。その窓からはるか東の方向の空がほんやり明るんでいるのを見た。翌日だか、大阪の方がやられたらしいと聞いた。大阪は東京大空襲の後だろうから、三月半ば過ぎか。日が経つにつれて、夜の明りが少しずつ近づ

いてくる。尼崎だ、神戸だ、明石だと、だんだん西にやってくる。そんな中、警報が出れば灯火管制で電気は消されるのに、南の海べりにある日鉄（現在、新日本製鉄株式会社）は溶鉱炉をあけて赤々と燃える滓を棄てる。あれを目がけて敵が爆弾を落とさないかと、子供心に恐れたが、後で聞けば、近くに捕虜収容所があり、大勢収容されていて、その工場で労役に使われていたから、落とさなかったという。「※終戦になり、その収容されていた人達がある日、大挙解放されて村に現れた。劣悪な食事に耐えていた彼らは村人に食料が欲しいと要求し、いくばくか入手して、何事も争いはなく収容所に戻って行った。薬剤師の叔父は、「心配するな、すぐ楽になれるクスリがある」と言った。飲まずに済んだから、私は以後、七十年を越えて生きていく。」

六月ごろか、もう少し後か、姫路が危ないと警報あわただしい。村の男たち（若い男は従軍して、ほとんどいない）は何処へ行ったか、女・子供は皆、防空頭巾をかぶり、祖母はお鍋をかぶり、集落の北側、田んぼの中に逃げた。そのうち、東の空に焼夷弾が夜目にもしるく雨あられと落とされる。世に白鷺城とうたわれる城がくつきり夜空に浮かぶ。誰もがお城が焼ける！と声を呑んでいた。その夜から何日後か、母が姫路の町中に知人が疎開されているとお見

舞いに行くと言い、私を伴った。姫路から網干までの山陽電車は途中まで乗れたが、神戸行きと分れる飾磨にまず探照灯を落したので、そのいくつか手前から電車は不通、線路をたどり姫路に入る。多分何日か経っていただろう、姫路の城下町は焼野原であったが、亡くなった人は見ていない。ただ、馬が何頭かまだ片付けられず放置されていた。

#### 《六月二十二日の姫路大空襲》

一九四五年六月二十二日九時五〇分ごろ、B 29爆撃機約六十機が飛来し、播但線京口駅西にあった川西航空機姫路製作所を中心に約一時間爆撃を続けた。爆撃の目的地である製作所は全壊したほか、周辺の民家や道路、上下水道なども甚大な被害を受けた。製作所にいた徴用や学徒動員、社員など多くの従業員や周辺住民を含めた人的被害は、死者三百四十一人、重軽傷者三百五十余人。

#### 《七月三日の姫路大空襲》

一九四五年七月三日深夜から翌未明にかけての約二時間、姫路市街地全域に焼夷弾が降り注いだ。火の手は姫路駅前から上がり、順次周辺へと拡大、町は火の海と化し、総戸数の40%が焼失。飾磨でも一部が被災した。死者約百七十人、重軽傷者百六十人余、全焼家屋約一万三百戸、被災者四万五千人余。市街地の北にある姫路城は天守に命中した焼夷弾が発火せず、奇跡的に焼失を免れた。<sup>1)</sup> ※「長い悪夢のような夜が明けた。焼け

跡に巨大な紅蓮の竜巻きが起こった。ゴオーと地獄の底から響いてくるような不気味な音をたてて目の前を通り過ぎた。全く夜が明けてから母達に再会できた。母達のひそんでいた壕には数本の焼夷弾が突き刺さっていて、昨夜の恐ろしさを物語っていた。<sup>2)</sup>」

《米軍側の資料では、「目標…姫路市街地、参加部隊…第313航空団、出撃機数…107機、第一目標上空時間…7月3日23時50分、4日1時29分。投弾の後半時に上昇気流が激しく、煙が2万フィートまで達した。」などが報告されている。〔米軍資料日本空襲の全容 マリアナ基地B 29部隊〕 小山仁示訳、東方出版(株)、一九九五年四月〕

八月十五日終戦。祖父の家に集って、終戦の詔勅を聞いた。天皇の声も話の内容も理解できなかった。父は京城で訓練中に落馬して胸を打ち病院にいたらしいが、私には詳しいことはわからない。秋になって引き揚げてきた。福岡のどこかの港に上陸し、父の会社の主軸工場のある下関に入った。下関は父の生まれ故郷である。父はその下関で半年位療養し、その後、大津村の仮住居に合流。十一月のはじめ、漸く一家五人、東京目黒の家に帰った。「※父は八十歳過ぎて亡くなったが、その後遺症を生涯引きずることになる。」

5 吉田ひろ子さんの「元寇」の歌

太平洋戦争の終戦時、吉田ひろ子さんは国民学校初等科四年生であった。その彼女が戦争中によく歌った歌の中に、「元寇」と言う歌がある。もともと、彼女はその歌のタイトルをはっきりと覚えていなかったけれど（蒙古襲来の歌かしら）などと言いながら、彼女が覚えている限りの歌詞を筆者の手帳に記してくださった。以下が彼女が即興で記した歌詞である。

〔\*傍点・傍線高橋〕

(1) 四百余州しひやくとせうを挙るこぞ／十万余騎の敵／国難ここに見る／弘安四年夏の頃／なんぞ怖れんわれに／鎌倉男子あり／武断果敢の名／一喝して世に示す

(3) いでや筑紫の海に／浪おしわけてゆく／ますらたけお猛夫の身／かえりみはせじものを・・・

彼女は三番の「いでや筑紫の海に／浪おしわけてゆく」という歌詞が日本画を見ているようで、子供心に好きだったという。

「元寇」は一八九二年（明治二五）に発表された軍歌で、永井建子が作詞、作曲を行っている。永井建子は旧日本陸軍軍楽隊士官であった。そのきっかけは、現在、福岡市の東公園に設置されている元寇記念碑建立の立役者、湯地丈雄の運動に共感

した永井建子が作詞・作曲したと聞く。原歌詞は以下の通りである。

(1) (鎌倉男児)  
四百余州しひやくとせうを挙るこぞ／十万余騎の敵／国難ここに見る／弘安四年夏の頃／なんぞ怖れんわれに／鎌倉男子あり／正義武断の名／一喝して世に示す

(2) (多々良浜)  
多々良浜迎の戎夷えいび／そは何蒙古勢／傲慢無礼もの／俱ともに天を戴かず／いでや進みて忠義に／鍛えし我が腕／ここぞ国のため／日本刀を試しみん

(3) (筑紫の海)  
こころ筑紫の海に／浪おしわけてゆく／ますらたけお猛夫の身／仇あだを討ち帰らずば  
／死して護国の鬼と／誓いし箱崎の／神ぞ知ろし召す  
大和魂やまとたましいいさぎよし

(4) (玄海灘)  
天は怒りて海は／逆巻く大浪に／国に仇をなす／十余万の蒙古勢は／底の藻屑と消えて／残るは唯三人みたり／いつしか雲はれて／玄界灘月清し

驚いたことに、吉田ひろろさんが記した歌詞の一番は、「正義武断」と「武断果敢」とが違っただけで、ほとんど原歌詞と同じである。ただ、三番の「こころ筑紫の海に」が「いでや筑紫の海に」と、「仇を討ち帰らずば」が「かえりみはせじものを」と、歌詞が違っている。これは、彼女が間違えたのではなく、彼女はするように歌ったのだと思う。「元寇の歌」の歌詞はいくつかあったことが、関連サイトに記されている (<https://ja.wikipedia.org/wiki/4/16/2018検証>)。問題は彼女が「かえりみはせじ」と歌っていることである。

まず、本題に入る前に、ひろろさんの生い立ちを記しておく。

ひろろさんは一九三五年（昭和十）、東京の世田谷に生まれた。お父上のエピソードとしては、一九三六年の二・二六事件当夜は若手検事として検事局（現、検察庁）で当直をしていた。翌朝庁舎は銃を携えた反乱軍兵士に包囲され、何故か検察最上層部からの指令は来ず、他数名と共に数日間缶詰状態にされたそうである。お母上は上野の東京音楽学校のピアノ専科の出身で、そのお母上の影響か、お父上も歌が好きで、歌の種類は内外問わず、よく歌っていたそうである。特に「会議は踊る」の主題歌「ただ一度の機会」が好きで、酔うと身振り手振りを交えてお歌いになったとのこと。ただ、彼女が「元寇」を歌ったというのは、

そうした家庭環境からではなく、彼女のまわりの子供たちが普通に歌っていた。軍歌というより唱歌といった感覚で歌っていたとのこと。また、お父上の任務の一つに、ドイツまたはヨーロッパの音楽著作権への対応があり、流行りだしたコンチネンタル・タンゴやドイツ歌曲の無断使用を咎める三国同盟の友邦ドイツから派遣された監視役の相手を務めていた。一度だけその方が奥様を伴って、ひろろさん宅を訪れたことがあった。その時は「外人夫妻が自動車に乗って来ますが、ドイツの方だから決してスパイではありません」とお母上がお近所に言っただけのこと。その後、一九四四年頃、お父上は応召してフィリッピン戦線へ、残されたご家族のうち、お兄さんは学童疎開で信州へ、ひろろさんはお母上、弟さんと一緒に母方の祖母の家へ、その後も転居を重ねるなど、ご家族が世田谷の家に戻ったのは終戦後一年半ほど経てからであった。

序に記したが、「かへりみはせじ」の初出は、『萬葉集』巻18・四〇九四の中の「かへりみはせじと言立て」である。この他に「かへりみせずて勇みたる」（巻20・四三三二、防人が悲別の心を追ひて痛み作れる歌、家持）、「かへりみせず我れは越え行く」（巻20・四三七二、防人歌）、「今日よりはかへりみなくて」（巻20・四三七三、防人歌）といった同種の詞が見える。一九四一年（昭和十六）十二月八日、昭和天皇の宣戦の詔書を

受けてラジオ放送を通じて発表された情報局長・奥村喜和男の「宣戦の布告に當り国民に懇ふ」という談話の中で四三七三番歌「今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは」を引用している。小松（小川）靖彦氏の論考「日中戦争下における「醜の御楯」の意識」によれば、この「かへりみなくて」は、日中戦争下では、（家も身も顧みずに）という意味に受け取られ、太平洋戦争開戦とともに、（一切の私事を顧みないで）という意味を持つようになり、銃後の国民に強い影響を与えた。「かへりみはせじ」と歌い替えて覚えたひろ子さんは、その意味をはっきりと理解しないまま無邪気に歌っていたが、故郷を離れ家人と離ればなれになっている辛さを常に感じながら、全員の再会をひたすら願っていたと思われる。

吉田ひろ子さんの歌った「元寇」は替え歌であったかもしれないが、そこに「かえりみはせじ」と言う歌詞が読み込まれていることが、時代の言葉として生きていた証と言えるであろう。

## 結

今回、昭和の戦時期に幼少期から青年期を過ごした五人の女性を対象に、ある人には聞き書きをし、ある人にはご自分で筆記していただいた。年齢によって感じたこと、記憶していることに差があるが、子供であっても、成人していても、皆一様に、国家という枠組みの中で必死に生きていた様子が窺える。ラジオから連日のように「海ゆかば」に代表される軍歌（「元寇」

も含めた）が流れていた時代であった。そうした時をひたすら生きた彼女たちが、今、豊かで実り多い人生を歩み続けていることを報告する。

(1) 宇佐見英治『戦中歌集 海に叫ばむ』「後記」砂子屋書房、一九九六年一月。

「宇佐見氏は一九四二年二月一日に大阪府信太山の中部第二七部隊（野砲第四聯隊補充隊）に入隊、陸軍二等兵になる。その後、スマトラ（この頃は、少尉）など南方戦線に参加。一九四六（昭和二十一年）年六月初めにバンコック湾を出港し、同月末に鹿児島に帰着。」

(2) 楽曲「海ゆかば」は軍によって戦死者の追悼歌として利用された結果、勇壮で力強い決意の歌という面と、悲壮感に満ちた追悼の歌という面を合わせ持っていた。最近では、戦時下における「海ゆかば」の受容について小松靖彦氏の詳細な論稿がある。（小松靖彦「大伴氏の言立て「海行かば」の成立と戦争下における受容」『国語と国文学』平成三十年七月号）

(3) いのうえせつこ『女子挺身隊の記録』新評論、一九九八年七月

(4) 「植田国民学校教員の推移」（秋田県平鹿郡）表（一九三七—一九四七年度）によると、一九三七（昭和十二年）年の教員の女性率は二六・七％、一九四〇（昭和十五年）年は四七・〇％、一九四五（昭和二十年）年は六四・七％に達した。いうまでもなく、

戦争が激化し、男子教員が兵員に召集されたあとの補充が、女子によってしかできなかった結果だ」(戸田金一「国民学校 皇国の道」吉川弘文館、一九九七年二月)とあり、女子や代用教員の増加がみられた。青年学校でも男性の教員不足は同様であった。

- (5) 高橋文雄『日本陸軍の精鋭 第十四師団史』下野新聞社、一九九〇年八月
- (6) 『うつのみやの空襲』宇都宮市教育委員会、二〇〇一年三月
- (7) 三浦英之『五色の虹―満州建国大学卒業生たちの戦後』集英社、二〇一五年十二月
- (8) 絵鳩毅『皇軍兵士、シベリア抑留、撫順戦犯管理所』花伝社、二〇一七年八月
- (9) 山中恒『御民ワレ ボクラ小国民 第二部』辺境社、一九七五年十一月
- (10) 総務省ホームページ「姫路市における戦災の状況」、6/26/2018検証
- (11) 前掲ホームページ(注10)
- (12) 『姫路空爆の記録―恐怖の昼と夜』姫路空襲を語りつぐ会、一九七三年六月
- (13) 小川靖彦「日中戦争下における「醜の御楯」の意識―聖戦短歌を通じて(戦争と萬葉集)―」『日本文学』5、Vol.64、二〇一五年
- (14) 漢詩の中にも「元寇」の歌の「かえりみはせじものを」と同

じような詞章が見える。頼山陽の「蒙古来」という詩の「直前 斫賊不許顧(直に前んで賊を斫り、顧るを許さず)」が、それである。「元寇」の歌と同じく、鎌倉時代中期の蒙古来襲(一二七四、一二八一年)をテーマにした詩である。「不許顧(顧るを許さず)」は鎌倉幕府の厳然たる姿勢を示した言葉となっている。当詩は文政十一年歳末に作られた『日本楽府』所収のものである。「元寇」の歌の原歌詞を見る限り、「蒙古来」の直接的な影響は窺えない。しかし、「蒙古来」が詩吟として民衆に延々と歌唱されてきていることを考えると、その影響が皆無ということはいえないように思われる。「日本楽府」の詩の中には、第一首「日出處」のように、我国の皇統の一貫に基づく国体への賛美など、以降の軍国精神の要素となるような文言が散見する。「蒙古来」と「元寇」との関係、「不許顧」と「かへりみず」との関係については、改めて別稿で論じたい。

(たかはし・のりこ／早稲田大学院博士後期課程)